

[シンポジウム]

共通テーマ

「人間科学と大学教育」

パネラー

早稲田大学人間科学部長

濱 口 晴 彦

常磐大学人間科学部長

安 田 健次郎

札幌学院大学人文学部長

中 野 徹 三

司会 札幌学院大学人文学部人間科学科長 廣 川 和 市



司会 定刻を過ぎましたので午後の部、シンポジウム「人間科学と大学教育」を始めさせていただきたいと思います。私、札幌学院大学の廣川と申しますけれども、たまたまこういうことになりましたのは、今年度の校務分掌で人間科学科長として、おまえがやれということで仰せつかったのでございますけれども、不慣れでございますのでいろいろ行き届かないことがあると思いますが、よろしくお願いしたいと思います。

今日の「人間科学と大学教育」というテーマと昨日、今日の全体の集会の中での位置ということについて、ちょっと勝手でございますが、申させていただきます。人間科学に関する教育についての経験交流会ということは、一昨年の第1回、昨年の第2回、いずれも、会場校早稲田大学人間科学部でお世話いただきましたが、この際の中心的なテーマでございました。今回、午前中に人間科学をめぐる研究のご発表をいただきましたけれども、もともとの成り立ちはそれぞれ様々な経緯で広い意味での人間科学に関する学部・学科がつくられてきていて、非常に新しいだけではなく、様々な問題点を抱えているということで、それぞれの大学で抱え

られている問題を交流し合おうではないかという所が柱であったかと思います。ですから午前中に行われました、人間科学に関する研究が今後、ますます発展しまして、当初からそういう指向が出されておりますけれども、人間科学に関する学会というものが近い将来開催されることになったといったましても、人間科学に関する教育をどうするかという問題は、その学会で取り上げようという盛り上がりがないと、今後とも重要な問題としてあり続けるのではないかと思います。

しかも人間科学がどうあるかということから人間科学の教育をどうするかへという面がもちろん基本だとは思いますけれども、逆に現実に存在する広い意味での人間科学の学部、学科の教育の問題点から人間科学がどうあるべきかという迫り方も当然なくてはならないのではないかと思います。今日皆さんにご議論いただきます「人間科学と大学教育」というテーマは今後とも重要な課題であり続けることでしょう。何分、今日は3時間ちょっとしかございませんけれども、おそらくまとまった結論というのは当然出にくいとは思いますが、来年開かれるあります第4回のフォーラムへの発展として、今日を位置付けていただければまことに幸いに存じます。

余計なことですが、シンポジウムのテーマ「人間科学と大学教育」であります、今日は午前中にご発表をいただき、質疑をいたしました、そういう人間科学の研究とそれをめぐる大学の教育ということで、"と"という接続詞はまさに研究と教育という大学における基本的な課題を人間科学に則して議論していこうということでは明確ではあろうと思いますけれども、「人間科学」あるいは「大学教育」というと、これはそれほど明確ではないと思います。これは午前中はつきり問題が出されたと思いますけれども、狭い意味の人間科学がどうあるべきかということだけではなくて、そういう問題も含みながら人間学か人間科学かという議論もありましたが、そういう点を含んだ広い意味での人間科学ということでご了解いただきたいと思います。今回私ども、会場校をお引き受けいたしましたときに、狭義の人間科学の学部、学科だけではなくて、広い意味の人間学部から始まりまして当然、人間科学部・科学科の先輩でもあります人間関係学科、学部、それから最近あちこちに設立されております人間を冠する学部、学科、たとえば最近では人間発達学科、人間形成学科、人間環境学科、人間福祉学科に至る広い意味での人間にに関する、あるいは人間という言葉を冠する学部、学科にご案内を申し上げて、(今回必ずしもそう多くの大学からはご参加いただけませんでしたけれども)、次は是非というご返事もいただいておりますので、広い意味での人間科学科という幅をもっているということがまず難しさの一つとして今日の議論のなかでも出てくるだろうと存じます。

それからもう一つ、「大学教育」でございますが、これは当然にも大学における人間科学の教育ということはもちろんでございますけれども、そういう専門の学部、学科をもたなくとも広い意味での人間科学に関する学部や学科を、ある大学にもっているということがその大学全体にとってどういう意味をもつたのだろうか、あるいは人間科学科をもっているということが学

部全体でその他の学科との関係でどういう意味をもつかとか、あるいはそういう人間科学のご専門の方がいらっしゃるということがその大学の大学教育全体にどういう意味をもつかとかいうような、様々な次元での人間科学と大学教育という問題がおそらく議論していただけるのでは、あるいは議論せざるを得ないのでないかというふうに思っております。

いまひとつは第一回のフォーラムのさいに、司会を務められまして、今日もご報告なさいますけれども、早稲田大学の濱口学部長先生から、人間科学というものを大学以外の、高校をはじめとする中等教育にどう定着させるかということも問題ではないか、というご提起がございました。今日、細見先生のご発表の中でも学生の期待と幻滅というようなお話もありましたけれども、実は今日の午前中、市民の方々も参加されておりましたし、お1人でしたが高校生の方もみえていましたが、(途中で帰られましたが)、大学関係者だけではなく、市民の方々あるいは高校生の方々も広い意味での人間科学について期待をもっていると、それが幻滅に終わらないように、大学としてどうしていくかということも「大学教育」ということの射程に当然入っていくのではないかと私なりに勝手にまとめさせていただきたいと思います。そういう広がりをもって午後のシンポジウムを自由にご討議をいただければと思っております。本来そういう性質のものでございますので、座席の配置もご提案の方々を中心として円くなるような配置が望ましいかなと思ったのですけれども、主旨としてはそれぞれのお立場から卒直にご意見をお出しitただくことをお願いしたいと思います。

それで進め方でございますけれども、最初にお三方からそれぞれの大学の広い意味での人間科学に関する教育の問題点、総括点ということをお話しいただきたいと思います。順序でございますが、こちらの方で内容をある程度頭におきながら最初に、10年間という実際のご経験をもとにして今どういう段階に到達されているかということを中心にして、早稲田大学の人間科学部長の濱口晴彦先生からご報告をいただきたいと思います。

その次に、現在の人間科学部という学部の到達点ということを中心にいたしまして、常磐大学の安田健次郎学部長先生にお話しいただきたいと存じます。

最後に人間科学あるいは人間科学科というカリキュラムの中の中核的といいますか、「要」というようなものが当然想定されると思うんですけれども、私ども札幌学院大学人文学部人間科学科の必修科目であります「人間学概論A」の担当者としてのご経験をふまえていただきまして、中野学部長からご報告いただきたいと思います。

だいたいおひとり30分ぐらいでご報告をいただきますが、それぞれの大学の学部、学科のでき方がありますので、様々な問題が出されてくると思います。本日、この会には大学としてご発表の大学以外に五つの大学の方、および個人としても参加をいただいておりますが、突然でまことに失礼でございますけれども、(こういう会で指定討論者の役割をもうける場合がございますので)ご発表をいただかない大学のご参加の方々、五校五大学の方々にご自分の大学のご経験もご紹介いただきながら、発表された方々にもっとこういう点はどうかというような



指定討論的な役割を（突然で申しわけありませんけれども）やっていただければ本当にありがたいと思っております。

そこでそういうご提起を五人の方におひとり5~10分くらいで出していただきまして、ある程度限られた時間での今日の討論の柱を限定させていただく形になれば幸いに存じます。時間が長うございますので、そこでいったん15分くらい休憩をいただいて、後半は

約1時間ございますけれども、この会の席が円く設定されているということを主旨として生かしていただくような卒直なご検討をご自由にお願いしたいと思います。

本来でありますと、今日ご発表いただくお三方についてご紹介申し上げるのが礼なのでございますが、最初にご発表いただきます早稲田大学の濱口学部長先生は、1回目、2回目の開催校の中心的な役割をなされた方でございます。今さらご紹介するまでもないと思います。2番目にご発表いただきます常磐大学の安田人間科学部長先生は昨日の懇親会でもごあいさついただきましたので、いらっしゃるみなさまご存知だと思いますので、お名前のご紹介で代えさせていただきます。それから最後の中野人文学部長につきましても同様だと思いますので、そういうことでまことに失礼ではありますけれども、この方々のご紹介は控えさせていただきます。

それではさっそくでございますけれども、最初に早稲田大学の濱口学部長先生からよろしくお願いいたします。

濱口晴彦早稲田大学人間科学部長「早稲田大学人間科学部創立から人間科学部宣言まで」

過去2回、人間科学を考えるというシンポジウムを行ってきましたけれども、第3回目はきわめて午前中から充実した話を聞くことができました。その話を引き取るような形で私が話をすることができればいいんですけども、必ずしもそうじゃなくて、「人間科学と大学教育」のうちの大学教育でも、特に私どもの学部の経験を、事実を紹介するという形で皆さんに問題提起をするような進め方をさせていただきたいと思います。

私の考えるところ、人間科学ということが学術の世界で話題になったのは過去3回あっただろうと思うのです。第1回目というのは言うまでもなく20世紀に入る以前の話ですけれども、20世紀に入ってから、また20世紀に入っても1960年代以降であって、そして今回人間科学を考えるシンポジウムを我々自身がやらなければいけないような必然性を考えてみると、事後的に

今から10年あるいは20年経った時点で人間科学そのものが学術の世界で話題になるのが4回目であるという位置付けがされる時期がやがて来るのではないかというふうに私は思っております。



というのは、それぞれの科学の歴史を振り返ってみると、その科学がなんであるのかということを弁解的に、つまりネガティブな形でいう時期を、日本の科学はこういうものではなくてこういうものであるという輪郭を説明する時期をどうしても経ざるを得ないだろうと思うんです。そのことに人間科学は今直面していて、人間科学はこうでなくて、こうであるという積極的な人間科学の位置付けということが、お

そらく10年あるいは20年経った時点で、肯定的に人々に受け入れられる。そのように非常に過渡的な時期に人間科学そのものが来ているように思います。

これは午前の部会のお話を伺っていて、またそのお話に対する質問の出方を見ても、そういう時期に来ているのだろうというふうに思います。

ところで人間科学そのものがこういう形で登場してきて、日本ではご承知のように1972年に大阪大学に人間科学部ができて、それ以来25年の時間が経っております。早稲田大学人間科学部は今から10年前にできて、やっと今11年目に入ったところです。学部そのものをつくる理念の背景にあった問題は文化的な期待ということです。その文化的な期待という言葉を言いだしたコールバーグという人の文化的な期待ということの説明にこういう事例があります。

アメリカで20世紀の初頭までに原野がしだいに荒廃していく。荒廃していく過程に森林がどんどん伐採されている。伐採されていくことがどのような文明史的な意味あるいは社会的な倫理をもっているのかというその意味づけ、あるいは書き付けを人々がすることができなかつた由に、森林そのものが破壊のままにされている。これでいいのだろうか。つまり二つの一方の技術的な物質的な文化とそれに対する精神的な文化の落差の大きさそのものを概念化したのが、ご承知のように文化的な期待です。人間科学そのものの発想の背後にあるのもそういうことにつながっているだろうと思います。

早稲田大学の人間科学部の創立の理念も、文化的な期待という言葉は使っておりませんけれども、それに類するような、つまりより理念的なものを現実的なものに転化していくための学問のあり方はどういうものであるか。あるいは人間の幸福という主観的な言葉を使って、その幸福を実現するための科学のあり方はどういうものであるかということを言葉としてうたつ

て、人間科学部を創設してきました。それ以来、10年が経ちました。

その人間科学部が現時点でどういうものであるのかということは皆さんのお手元にあります統計〔112～117頁の資料(4)を参照〕を紹介するという形でやらせていただきます。この統計そのものは人間科学部を紹介するために最近つくって、はじめて訪れる方々にも配布し始めているところであります。一番始めに教職員が何名ぐらいいるのかということが書いてあります。それから二番目に学生が現在何名ぐらいいるのかということが書いてあります。そして卒業生が累計で3726名いることになります。そのうち教員が、どういう形のどういうことを主専門にしているかが示されています。学術活動の所では、文部省の科研費の改革の問題、それから早稲田大学がもっている申請をして研究費をとるというやり方、これは特定課題研究とよんでおりますけれども、それがどういうふうになっているのか、それから次は評価、それから入学試験が書かれています。入学試験がここで出てきたのは、入り口があって、途中に大学教育があって、出口がある。もう一つの定義を言いますと、就職の問題が出ていますけれども、出口がどうなっているかという考え方で、入学試験は1997年度ではどういう入学試験をやって、どういう形の学生から構成されているのかというふうになっております。それから一般入試の志願者が、これは例にもれず、今のところ5千人ぐらいの所に低迷しております。

それからもう1つの方に、一般入試の現役、浪人の経緯ということで、こういう比率になっています。

それから早稲田大学は、人間科学部は今まで出てきておりませんけれども、三つの学科から成り立っております。一つは人間基礎科学科です。これはどういう構成のされ方をしているのかと言いますと、心理学と言わずに心理系、社会学と言わずに社会系といってますが、これに生命科学系が加わって三つの系から人間基礎科学科が成り立っていて、定員は1学年100名です。

それからもう一つが人間健康科学科です。人間健康科学科は、人間工学、社会文化、臨床心理、心理系、それに教育工学といういくつかの系統から成り立っております。一学年が160名です。

それからスポーツ科学科は、要するにスポーツ選手であるとかスポーツ心理であるとかいわゆるトップアスリートを集めている。これが今から紹介しようと思っている特別選抜、種目別合格者数という所であります。というように、そういう三つの学科でこのスポーツ科学科が240名です。一学年500名の定員なんですが、今申し上げたように100名、160名、240名という組みの中で特別選抜が50名割り当てられていて、その50名のそれぞれの専属ごとに試験をやるものですから、必ずしも応募ってきてそのままというわけにいかないんです志願者数が1番下の欄のところにあって、合格者が50名という形になります。カッコの中は女子のあります。これが特別選抜という所であります。

それから人間科学部のもう1つの特徴は大学院志願者が相対的に多いということではないか

と思うんです。初年度入ってきた1年生に大学院志望を聞くと、約4～5割の学生が大学院志望を表明します。けれども実際に行くのは、この表にありますようにこれだけの数であって、修士課程に43名が進学しております。その他、早稲田大学には人間科学部を含めて9つの学部がありますけれども、他の学部からの進学者、それから他大学からの進学者あわせて定員が70名ということです。今日この人間科学研究科の委員長の春木先生もいらっしゃっておりますので、後程もしこのことについてご質問があればお伺いすることができると思いますけれども、こういう大学の人数であります。

それから就職先・業種別一欄というのが、先程申し上げたように入っています。途中の大学教育があって、どういう出方をしているのかということで、就職先の一欄があります。人間科学部がこういうスタッフで、こういう数字の上から見るとこういうことだということです。早稲田大学人間科学部の現時点では単に統計要覧という形で配っているものを、本日は人間科学部のアウトラインということで、数字の上から見た場合どういうふうになっているのかということを説明するために付けさせていただきました。

それから次に人間科学部の教育の問題ですけれども、皆さんのお手元にあります、1996年度までのカリキュラムと1997年度からのカリキュラムが左右に対比されております。カリキュラムそのものをこのような形で対比した理由はどこにあるかというと、創立当時のカリキュラムから新しいカリキュラムに変えたときにどういう改訂の必要性があったのか、つまり教育を実際にを行う上でどういう問題点が過去にあったのかを示したいからです。私が学部長に就任した年から改訂に取りかかって今年の1月から新しい1997年度のカリキュラムに移行いたしました。

それでは1996年度のカリキュラムと1997年度のカリキュラムの大きな違いはどういう所にあったかといいますと、全部で5点指摘することができます。

1つは選択の自由度を高めたということなんです。先程申し上げましたように、従来3つの学科から人間科学科は構成されていて、人間基礎科学科は卒業に必要とする単位が141単位であり、人間基礎科学科もスポーツ科学科もほぼ138とか140を前後する所に卒業に必要な単位を設定しております。140を前後する所の単位を、こういうものを取りなさいという指定の枠が強かったのをかなりゆるめ、選択の幅をより高めたという点を第1に指摘することができます。

2番目に指摘できることは、それぞれ3つの学科の言うなれば学科指定という科目が比較的多かったことです。それぞれの学科指定の科目を、したがって他の学科の学生が同じ学部の中にあるけれども他の学科の科目をとるというときに、それぞれの学科に対して他学科聴講願いを出すという必要性があります。そういうふうに学科間の壁を低くしたというのが第2の点として言えます。

それから3番目に言えることは、先程触れましたけれども、卒業の必要単位を124

単位に少なくしたことです。140単位を前後する所であったのですけれども、124単位にして学生の負担を軽くし、時間の上での余裕をもたせるというふうにいたしました。

それから4番目に、カリキュラムをつくる際に学生の参加を入れていることです。1997年度の統計を見ますと、人間科学テーマ科目というのが1番下の方にあります、この人間科学テーマ科目をつくる際に学生の意見を受け入れ体るんです。これは全部ではないんですけども、そういうHuman Science Todayと横文字で書いてある部分をつくる際に学生の意見を受け入れていくというつくり方をしているという点を第4に指摘することができます。

そういうことで全体から見ると特徴は自由度を高めた。あるいは学ぶ側の動機づけに待つという、カリキュラムの上での環境を変えていったという点が、大きな輪郭の上での違いということになります。

またカリキュラムそのものを変えることによって、全部でおそらく600ぐらいの科目が設定されているはずです。そういうようなカリキュラムになっております。

1996年度の科目的とり方をみると、例えば1番上の所に一般教養科目、2番目に外国語科目、3番目に専門教育科目というようになっていたのを、1997年度からのカリキュラムでは、学部の学生は必ずこれはとりなさいという学部指定科目の中の、例えば人間科学Ⅰ、人間科学Ⅱという科目が1番左の上にあります。人間科学Ⅰというのは1年生、2年生の間にこの中から2つとりなさいということです。人間科学の科目は語学および演習を除くと、すべて前期、後期2単位の構成からなっております。

というわけで、人間科学Ⅰというのもそういう前期、後期の2単位のものです。その中から2つ選びなさいと、それから3年生2学期以降になって人間科学Ⅱをその中から2つ選びなさいという学部規定をしております。それから外国語は英語を第1外国語にして、第2外国語としてドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、スペイン語という科目を設定しております。最近の傾向として中国語の受講者の需要が非常に急増しております。そのためにクラスをどのように編成するかというのが技術上の今さしあたってやらなければいけない問題です。ロシア語が急激に落ちているというのが大きなこの中の特徴であります。

情報処理Ⅰは必ず学部の学生はとることになっています。つまりリテラシーを必修にしております。それからⅡ、Ⅲ、Ⅳというのは選択であります。このことの詳細は先程お配りしました別の冊子の中に書いてあります。

それから卒業論文は、これまで卒業論文と言っていたんですけども、それを卒業研究というように名称を変えて、従来通り8単位を与えるということであります。

次は学科指定科目でございますが、これは先程申し上げましたように三つの学科がありますので、人間基礎科学科、人間健康科学科、スポーツ科学科というふうに、それぞれの学科の指定している科目があります。この横に自由科目とあるのは、9講座および上級英語、それからそれぞれ卒業にカウントされない科目、124単位の中に入らない科目です。本来ならばこの線

がはずさなければならないのですけれども、独立した科目として自由科目が設定されております。東洋医学の人間科学、分子神経生物学、ジエロントロジー等であります。

つまり、人間科学テーマ科目というのは全体が11のカテゴリーに分かれておりまして、これを合同でやるとかというわけでそれが選択をするという形で構成されております。以上人間科学部のカリキュラムのあらましであります。

そうすると、人間科学部の学生には一体どういう人間科学の出口があつて、途中があつて、出口があつて、出てきた学生が人間科学を受けとっていくかが問題になります。これは大学院を私が担当しております。大学院の科目に人間科学特論というのがあります。ほぼ入ってきたマスター1年の学生がそれをとるのが多いんですけども、例えば人間科学と自分が主としてやろうとしていることとの関係から人間科学について論じなさいというレポートを毎年出しております。今年は約20名程受講して、その受講した学生のレポートを実は今紹介しようと思ったんですが、時間がなくなりますので省略します。

全体の傾向から言うと、人間科学を彼らがどのように捉えているかは、ほぼ4つぐらいのタイプに分けることができます。これは1つはプロトタイプと呼べるのではないかと思うんです。プロトタイプという人間科学の性格づけはどういうものかというと、特に医学および自然科学をやってきた人たちの特長として出てくるタイプで、人間の肉体そのもののことわりを知っているからそのことの延長線上で人間科学を考える。例えばアレクシス・カレルの例が私はそうだと思います。あるいはサン・シモンの例がそうだと思います。人間科学部のカリキュラムを見てお分かりのように、医学関係の講座がかなりありますので、そういうタイプの学生が出てきます。他大学の大学院に進学する際に、医学系の大学院に進学する学生もありますので、そういうタイプのレポートを出す学生がおります。2番目のタイプはどういうタイプかと言うと、ご承知のように人間科学は様々な科学を統合する科学だというインテグレーションまたは統合科学というタイプの論文です。これが数の上では1番多く出てきます。3番目はどういうものかというと、人間そのものが関心の中心であるので人間にに関する科学がそこから様々に派生していく細分化、専門化した果てにもう一度これではならじというで人間に返ってくるというものです。そういう人間を基点にして様々な科学が派生し、そしてもう一度人間に返ってくるから、リサイクルと言うのでしょうか。そういうリサイクル的な論文が出てきます。4番目のタイプはどういうものかというと、午前の話の中にもありましたけれども、人間科学と人間観という観点から言うと、むしろ人間科学ではなくて人間学であるというものです。アントロポロジー型というのでしょうか、そういう人間科学の把握の仕方、理解の仕方をしたレポートが大学院生のレベルで出てまいります。大学院に進学した学生の側から出たレポートの荒っぽい要約をすると、そういうタイプのものが出てきます。

それをエピソードふうに言いますと、こういう経験をつい最近いたしました。それは、助手は全部で21名いるんですけども、人間科学部出身の助手と人間科学部出身ではない助手を交

えて座談会をやった際に、人間科学部出身の学生の発言と人間科学部以外の出身の助手の発言が明らかに違っていたんです。どういう点が違うかというと、様々な学問を習得することの積極的な肯定という方向が人間科学部出身の学生の発言の中に伺うことができたことです。それをエピソードふうにして一言付け加えておきます。

次に人間科学部宣言〔111頁の資料(4)を参照〕が皆さんのお手元にありますけれども、これはなぜこういうことをしたかというと、これは今年の5月の学部の協議会でこういうような宣言を承認していただきました。ここに書かれていることは読んで字の通りなんですけれども、背景を申し上げますと、1つは人間科学と現在とのつながりです。第2点は人間科学が時代の現実的な対応の中で人間科学を捉えていこうという点です。第3点は要するに人間と人間の全体的な、横同志の共生もあるし、同時に自然との共存関係というのを積極的に比較的に捉えていこうという所にあります。4番目には、人間科学部は他の人間科学部以外の8つの学部と違って、人間科学部は自らが絶えずこういうものであるということを言つていなければ、人々から人間科学とは何であるかというのは分かってもらえないという宿命をもっております。これは早稲田の人間科学部のみならず他の人間科学部でもそうであると思います。

そういうことを逆手にとって、むしろ積極的に地元につながりをもつていこうではないかということを、地元から世界へ向かって広がっていくということを積極的に打ち出している。実際にそのことを先程紹介しましたように、一方では公開講座等をやりながら、そのことをやつております。5番目に人間科学部では日常的に点検する。日常的な点検という点ではまだ行つておりませんけれども、今学期以降に新しい委員会をつくって、今申し上げた目標としてご紹介しております人間科学部宣言をどのように具体化するかという手立てを次に考えてみたいというふうに思つております。

ということで早稲田大学の人間科学部は10年目でやっと1まわりをしたということになります。大学院の2回目のドクターを出してほぼ1まわりをした所であるということが言えるのではないかと思います。紹介をかねて外郭を申し上げました。

司会 どうもありがとうございました。10年というご経験を積まれて、特にカリキュラム改革を中心にしながら、これまでの到達点と今後の展望をお話しいただきました。後程ご討論いただきますけれども、いくつかのことに集約されていくと思いますので、ここではご意見ではなくて、こういう点はどうなのかということを是非確かめたいということに限ってのご質問をお受けしたいと思いますが。

安栄 札幌学院大学で保健体育を専攻しております安栄鉄男と申します。先生にちょっと教えていただきたいのですが、人間科学の中に人間健康科学とスポーツ科学があり、2つの分野の占めるウエイトは高いんですが、どういった根拠でこれを取り入れたのか。その教育理念に

ついてお教えいただきたいと思います。

濱口 人間基礎科学科がどちらかというと基礎的なことをやりまして、人間健康およびスポーツ科学科が応用をやるというふうに位置づけるといいと思いますが、私自身が人間基礎科学科に所属しているので、これで話はいいんですけども、2つの学科の先生方からあるいはそこは違うとクレームがつくかもしれません。私の頭の中の概念図としては、大きく言うとそういう図形になっております。

安栄 私の認識が違ったかと思いますが、早稲田大学で人間科学部としてスポーツを非常に重要視して入れたのは11年前ですね。多分当時の学部長さんだったと思うんですが、確か受験雑誌に、人間科学科の1番大切なテーマは人間であって、これを追求するためには心と身体をトータルに研究するんだと、そういう面でスポーツとか体育、身体面は非常に重要視しなければならない、とお書きになっていました。そういう点に力点を置いて、こういった科目を取り入れたというようなパンフレットがあったら分かりやすいんですが、そういうことで僕自身は理解してきたわけなんです。

濱口 今おっしゃった説明は、初代学部長が絶えずそういうことをおっしゃっていたので、私もそういうふうにご理解いただいても結構だと思うんですけども。

司会 前のフォーラムのときには、人間科学の研究者の後継者養成ということで大学院教育にも論議が及んだかと思いますが、そういう問題も含めてもしございましたらお願ひします。では後程またお出しいただくことにいたしまして、続きまして常磐大学人間科学部長の安田先生、どうぞお願ひいたします。

安田健次郎常磐大学人間科学部長「人間科学の教育—現状と課題」

常磐大学の安田と申します。出身は理科系なものですから、申し上げることが少しずれるかもわかりませんけれども、我々の学校の現在の紹介と悩むことその他、少し申し上げたいと思います。

そもそも理科系には人間科学的な発想がなかったかということになります。さっきからいろいろな名前が出ておりましたけれども、事の始めはボーアの法則のボーア、物理学者で水素原子の解明でノーベル賞をとったボーアの日本訪問がきっかけであると言われています。そのころは理化学研究所に仁科所長がいらして、コペンハーゲンに留学して、その後でボーアを招いたわけです。昭和11年のことだと思います。そのときにボーアが言うには、物理学はやがて人